

2011年
10月20日
木曜日

栗田匡相 助教（開発経済学）

風を探して

「ただし、店でじっと待っていてれば、幸運が扉をたたくというものではない。好機というものは、しばしば予期せぬ偶然としてやってくるものであり、それがさつと目の前を通り過ぎる前に、勇敢にあるいは無謀に、これを捕まえないければならぬ。思うに、冒険精神ほど、本当に生産的な学問生活にとって決定的に重要なものはないだろう。インドネシアでは、道で誰かに「どこに行くのか？」と訪ねられたとき、（中略）

「風を探しているんだ」と答える。

港を出て大海原に向かう帆船のようだ。冒険と言っても、私が子供時代に少年小説で読んだ類のことを言っているのではない。大学や学部制度、あるいはディシプリンに安住してしまおうと、研究者は港を出ようとはせず、風を探そうともしなくなる。風を探そうとの心構え、風を

見つけたらそれを捉えようとする気が大切なのだ。そのためには、ヴィクター・ターナーの巡礼ではないが、物理的な旅と精神的な旅の両方をすることが重要だ。」

ベネディクト・アンダーソン

筆者のゼミでは、2年生の秋学期に「日本を気づく」旅を開催している。去年は沖縄の辺野古や高江といった土地を訪れ、今年も東日本大震災のボランティアツアーに参加するため、2年生の学生20名と一緒に10月末に宮城県東松島市宮戸島月浜集落へと向かった。その詳細はゼミのWebページを見てもらいたい。が、何故、こうした旅をわざわざ経済学部の開発経済学を専攻するゼミで行っているのかといえば、前述のアンダーソンの表現を借りれば、「風」が吹いていることを知らない

学生が多いからなのだろう。

「幸運」や「風」の通り道を探し当てるには旅が必要だが、しかし「幸運」や「風」の存在を知らなければ、世界のどこの場所に旅をしても、得られるものは単なる記憶と経験だ。

しかもそうした記憶や経験はWeb検索可能であったりすると同値だったりするからたちが悪い。もちろん冒険精神などもってのほかだ。行動を起こす前に確率的見地からリスクの存在を正確にいいあてることが現代を生き抜く作法だからだ。冒険精神はそうした作法からは対極に位置し、忌むべき精神性であるのかもしれない。

「自分の進みたい道がわからぬ」という学生は多いようだ。思うに筆者自身は、あまりこういう疑問にかけを自分に課したことがないことに気づく。おそらく無意識に「幸

運」や「風」の存在を知っていたからなのだろう。だから、自分の進みたい道が分からないときには、とりあえず風を探しに出かけていたのかもしれない。ずいぶんとお気楽な人間であることは間違いない。

でもどうして筆者は「風」の存在を知ることが出来たのだろうか？それは「周り」が教えてくれたからだし、今でも絶えず教え続けてくれている。あなたの周りにだってそうした呼びかけはたくさん転がっている。だからこそ、そうした呼びかけに応答しようとする責任と冒険の精神を持つことが重要だ。そしてそこから旅は始まっていく。「風」の存在を感じることが出来たならば、あなたは自分の進みたい道で悩むことは無くなるだろう。なぜなら、そのときには既に自分の進みたい道を歩んでいるはずだから。 ■